

動詞とその項—英語とフランス語から

Verbs and their Arguments: Evidence from English and French

研究代表者 高橋将一

Shoichi TAKAHASHI

本研究プロジェクトは、人文科学研究所 2019 年度研究プロジェクトである「動詞とその項—英語とフランス語の格構造を中心に—」を継続する形で始まった。よって、学内からの研究プロジェクトチーム構成員として、フランス文学科の尾形教授、金子教授、英米文学科の中澤教授、高橋が引き続き加わった。また、井口容子広島大学教授、武本雅嗣山口大学教授、敦賀陽一郎東京外国語大学名誉教授にも 2019 年度から継続してプロジェクトに加わっていただいた。年度当初は、意見交換などを目的とした研究プロジェクトチーム構成員による研究会や学外からの研究プロジェクトチーム構成員を招いての講演会を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大の深刻さの度合いが増してしまい、これらの開催には至らなかった。研究活動上、非常に残念な結果となってしまった。以下では、上記 7 名の研究プロジェクトチーム構成員の 2020 年度の研究プロジェクトについての報告を記す。

譲渡不可能所有構文と定冠詞

井口容子

広島大学大学院 人間社会科学研究科

2020 年度は、まず 2019 年度に引き続き、フランス語の譲渡不可能所有構文のうち、所有者が与格の再帰接語代名詞として表されるタイプのものに注目し、この構文が代名動詞の用法全体の中でどのようなステータスにあるのか、ロシア語の *ся* 動詞とも比較しながら考察した。詳細は井口（2020）を参照されたい。

これと並行して、2020年度は譲渡不可能所有構文における冠詞の問題を考察した。フランス語と英語の譲渡不可能所有構文の振る舞いの違いを、両言語における定冠詞の性質の違いに帰せしめるのか、それとも定冠詞そのものにはこの二つの言語で相違はないのか、ということについて、研究者の間で見解は分かれる。前者の立場としては Guéron (2003)、Vergnaud and Zubizarreta (1992) 等が挙げられ、後者としては Le Bruyn (2014)、金子 (2020) 等が挙げられる。

主語が身体部位の所有者と解釈される、Guéron が「I 型」と呼ぶタイプの譲渡不可能所有構文には、次のような仏英の相違がみられる。

(1) a. Il lève *la* main.

he raises the hand

b. He raises *his*/*the hand.

Le Bruyn (2014) はこれを I 型が成句的な性格を持つことに起因すると考える。だが確かに英語においては定冠詞の使用は *bend the knee* などの成句的なものに限られるが、フランス語では *fermer les yeux* 「目を閉じる」、*ouvrir la bouche* 「口を開ける」など、かなり広い範囲の日常的な動作が含まれる。このことはフランス語と英語の定冠詞に、やはり何らかの相違がある可能性を窺わせる。譲渡不可能所有構文におけるフランス語の定冠詞を、虚辞的決定詞 (expletive determiner) とみなす Vergnaud and Zubizarreta (1992) の分析、及びこれを指示の場 (locus of nominal reference) である決定詞ではなく、classifier である とみなす Guéron (2003) の分析は、それぞれに興味深い。他方において、金子 (2020) は身体部位が前置詞句内にあるタイプの譲渡不可能所有構文においても、distributivity effect 及び記述的形容詞の許容に関して、Guéron の言う「I 型」、「II 型」と同様の振る舞いがみられることを指摘する。このことは、Vergnaud and Zubizarreta 及び Guéron の分析はこのままでは問題を含んでおり、修正を加える必要があることを示唆する。

譲渡不可能所有構文における定冠詞の問題は、DP 及び所謂 weak referentiality 全般の問題にもかかわってくる興味深いものである。今後も考察を重ねていきたい。

参考文献

- Guéron (2003) "Inalienable possession and the interpretation of determiners", *From NP to DP*, vol. 2, 189-220.
- 井口容子 (2020) 「フランス語の譲渡不可能所有者与格の代名動詞とロシア語の *ся* 動詞」, *Stella* 39, 129-143.
- 金子真 (2020) 「フランス語と英語における、動詞の必須項でない与格について」『青山フランス文学論集』29号, 46-75.
- Le Bruyn (2014) "Inalienable possession — The semantics of the definite article", Aguilar-Guevara, A.,

B.Le Bruyn, J.Zwarts (eds), *Weak Referentiality*, 311-334.

Vergnaud, J.-R. and M.L.Zubizarreta (1992) "The Definite Determiner and the Inalienable Constructions in French and in English", *Linguistic Inquiry*, 595-652.

動詞の語彙特性と格構造：間接目的をめぐる

尾形こづえ

元青山学院大学 文学部フランス文学科

フランス語で間接目的 *à N* を取る動詞はその代名詞化の可能性、動詞に前置される *lui* 等の与格人称代名詞、中性代名詞 *y*、動詞に後置される *à lui* 等の *à* + 強勢形代名詞に換えられるかで4タイプに分けられる (cf. Blanche-Benveniste, 1978 : 3) : (I) *lui, y, *à lui : donner* (to give), *appartenir* (to belong), *mettre* (to put), (II) *lui, *y, *à lui : parler* (to speak), (III) **lui, y, à lui : penser* (to think), (IV) **lui, y, *à lui : remédier* (to remedy). (I) タイプの動詞のうち、*mettre* は具体的・抽象的な使役的移動の到達点を要求するその語彙特性から、

- (1) *Elle a mis les rideaux à la fenêtre.* → *Elle y a mis les rideaux.* (She put the curtains on the window → She there-put-the curtains)

のように *y* への偏向が強いと予想されるが、与格 *lui* も現れる。本研究ではこの *mettre* に注目し、同じ (I) タイプの三項動詞の中で与格 *lui* への偏向が著しい *donner* と比較しながら、一つの動詞の構文可能性の中で *lui, y* がそれぞれどのように特徴づけられるのか、実例の観察に基づいて考察する。コーパスとして *Le Monde* (1994) の約 15000 例中の 978 例とデータ・ベース *Frantext* を使用する (以下で N_0 : 主語、 N_1 : 直接目的、 N_2 : 第2項、*prép*: 前置詞、*V*: 動詞、 $(a+b)$: *a* または *b*)。

mettre 構文中の間接目的 N_2 「+ 人間」の現れ方をまとめると与格を含む次の3タイプが認められる。

(i) 与格 1

- (2a) *Elle lui a mis son manteau.* (She-him/her-put-his/her coat)

- (2b) *Elle lui a mis la main sur l'épaule.* (She-him/her-put-the hand-on the shoulder)

(ii) 与格 2: この用法は言語レベル上有標で口語でのみ用いられ、lexical dative ではない。

- (3) *Ils m'ont mis la pression.* ← *Ils ont mis la pression (sur + *à) moi.* (They-me-put-

the pression ← They-put-the pression-on me)

(iii) 与格にならない **prép N₂**: 「+人間」

(4a) Elle met *sa confiance* (en+dans+*à) son fils. → Elle met *sa confiance* en lui. [***lui** V] (She puts her confidence on her son → She puts her confidence on him)

(4b) Elle met *sa confiance* (dans+en+*à) ce projet. → Elle **y** met *sa confiance*. (She puts her confidence on this project → She-there-puts her confidence)

(4a) の **prép N₂** 「+人間」は **lui** にならないが、同格で **en** (son fils+**lui**) が文中に表されている場合、口語では **y** で受けることが可能である。

(4a') Elle **y** met *sa confiance*, en (son fils+**lui**). (She-there-puts her confidence, on (her son+him))

これを同じく **N₁ confiance** を取る **donner** の構文と比較すると、**donner** では **N₂** は「**N₀** の行為の相手」、「**N₁** の主体的受取り手」の位置づけで、**N₂** 「+人間」は (5) のように与格になり、**N₂** 「-人間」の (6) もインフォーマントによると代名詞化は **y** ではなく与格 **leur** が自然とされる。

(5) Jujube **lui** a donné *sa confiance*. (J. GRÉCO. *Jujube* (1982)) [***y** V] (J-him/her-gave her confidence)

(6) Il n'est point de comptable qui donne *sa confiance* aux colonnes de chiffres. (ALAIN. *Propos* (1936)) → [**leur** V, ***y** V] (No accountant gives his confidence in columns of figures)

mettre に可能な構文を通して与格が現れるのは、言語レベルの限られた (ii) を除くと、(i) のみで、与格の不可能な (iii) と比較すると **N₂** 「+人間」が与格になるのは、移動が具体的で明確な方向性を持ち、到達点の「+人間」に個別性、特定性が認められる時に限られていると特徴づけることができる。方向性位格 **y** はこれと比較して制約が少なく、多様な移動の到達点に代わって現れる (4a'), (4b)。他方、**donner** の構文は動詞の語彙特性により「**N₁** の主体的受取り手」である与格の存在に基づいている。今後、対象とする動詞の範囲を広げ、引き続き個々の動詞の語彙特性と与格、方向性位格、更に **à lui** の使用可能性の関係を事例の調査に基づき検証していきたい。

参考文献

- Blanche-Benveniste, Claire. 1978. À propos des traits sémantiques utilisés en syntaxe : critique du trait +/- humain. *Cahiers de Linguistique* 9, 1-15.
- Gross, Maurice. 1975. *Méthodes en syntaxe*. Paris : Hermann.
- Leclère, Christian. 1978. Sur une classe de verbes datifs. *Langue française* 39, 66-75.

尾形こづえ, 2005, 「間接目的 *lui* と *y* の対立: 動詞 *donner* の場合」『フランス語を探る – フランス語学の諸問題 III』三修社, 60-75.

2020, 「動詞の構文可能性: 方向性位格をめぐる」『青山学院大学文学部紀要』62, 133-162.

フランス語と英語における、動詞の必須項でない与格について

金子真

青山学院大学 文学部フランス文学科

本研究では、フランス語と英語に見られる次の3つのタイプの与格表現を扱った。I) (1a) のような、不可分離所有を表す構文において、所有者が与格で表され、被所有物が通常定冠詞を伴う名詞句で表されるタイプ。現代英語はこのタイプを許さず、(1b) や (2b) にみられるように、所有者は通常所有形容詞で表される。II) (2a-b) のような、くだけた会話で観察され、主語と同一指示の代名詞が与格として現れるタイプ。取り除いても真理条件の意味の違いは生み出さず、主語 (= 与格) の指示対象が出来事に参与すると同時に心理的に影響を受けることを表す。英語では南部アメリカ英語で観察され、*personal dative* とも呼ばれる。III) (3a-b) のような、くだけた会話で見られる「心性与格」と呼ばれるタイプ。与格の指示対象は、出来事の参与者ではなく出来事に心理的に関わるだけである。現代英語では (6b) のような慣用句の表現でしか見られない。

- (1) a. *Je lui prends le bras.*
 b. **I took him the hand.*
 c. *I took his hand.*
- (2) a. *Je me bois un bon café.*
 b. *When I was a young girl, I had me a cowboy* (John Prine, “Angel From Montgomery”)
- (3) a. *Regarde-moi ce désordre!* (高田 2003: 19)
 「見てくれよ、このひでえさま！」(高田訳)
 b. *Cry me a river.* (Arthur Hamilton が 1953 年に作詞・作曲した曲のタイトル)

これらのタイプは一見周辺的あるいは例外的な用法に思われるが、高田 (2003: 31) が提案した「与格用法の一貫した特徴は、動詞を中心とする文の構造化に積極的に参与しないこと

にあるのではないか。動詞の「要求する」項構造から遊離して、外的要素としていわば自由に任意に文に導入されるのが与格の本質の一端をなすのではないか」という観点からすると、意義深いものであると考えられる。

本研究では、今後研究を進める準備として、それぞれのタイプに関する先行研究を比較対照し、以下のように整理した。タイプⅠ：①「英仏語の違いを定冠詞の性質の違いに帰す」分析よりは、②「両言語の違いは二重目的語構文のあり方の違いと経験者の表し方の違いに基づく」とする分析の方がより妥当である。タイプⅡ：①統語的に、「フランス語では主題役割が付与される領域（動詞句）の外にある」という分析も、②「南部アメリカ英語では二重目的語の与格と同じ位置にある」とする分析も、両言語の現象を不足なく説明することはできない。特に、前者の分析では動詞句内に位置するはずの受益者と格と共起できないことが、後者の分析では非能格動詞とは共起しない一方状態動詞と共起することが、問題として残る。タイプⅢ：①「文の左方周辺領域に位置する機能範疇の投射の指定部に現れる」とする統語的分析と②「慣習の含みを表す」という意味的分析が提案されているが、どちらの分析にとっても、タイプⅡと共起するか、累加的に用いることができるか、を明らかにする必要がある。

最後に高田（2003）が（3a）の和訳に見られるように、タイプⅢを授受動詞を用いて訳していることを指摘し、統語的観点からすると、タイプⅡ、Ⅲのような「心理的影響」を表す与格表現は、英仏語では機能範疇の投射の指定部として音声化されるのに対し、日本語ではその主要部として音声化される、という可能性を示唆した。

参考文献

- 金子真（2020）「フランス語と英語における、動詞の必須項でない与格について」『青山フランス文学論集』29号, 46-75.
高田大介（2002）「フランス語の心性与格」『フランス語学研究』37号, 19-33.

「経験者」という主題役割を担う項についての研究

高橋将一

青山学院大学 文学部英米文学科

当初の予定では、フランス語の「経験者」という主題役割を担う項の統語的性質について取り組み、英語の同様の要素と比較することを予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大への対応等でこの研究プロジェクトに対して十分な時間を費やすことができず、ここで報告できるような研究成果をあげることができませんでした。研究代表者であるにもかかわらず、このような結果になってしまい心からお詫び申し上げます。申し訳ございませんでした。

認識的与格について

武本雅嗣

山口大学 人文学部

今年度はとくに、次のような認識動詞 (*connaître* ‘know’, *croire* ‘believe’, *sentir* ‘feel’, *trouver* ‘find’, *découvrir* ‘discover’, *reconnaître* ‘acknowledge’, *voir* ‘see’, *supposer* ‘suppose’, etc.) と結合する非語彙的与格である認識的与格 (*datif épistémique* ‘epistemic dative’) について分析・考察を行った。

- (1) Je **lui** trouve mauvaise mine. (Olsson 1984)
 I him/her-DAT find bad complexion
 ‘I think that he doesn’t look well.’
- (2) On. **lui** croit une femme dans chaque port. (Kupferman 2004)
 one him/her-DAT believes a woman in every port
 ‘People believe that he has a woman in every port.’

与格標示の有生物と直接目的語の指示対象の間には所有関係があるように思われるが、所有動詞 *avoir* ‘have’ で構成される補文構文と認識的与格構文は常に交替可能なわけではない。

- (3) a. Je suppose qu’ **il** a {peur / une peur terrible des femmes}.
(Ruwet 1981)

I suppose that he has fear a fear terrible of-the women
‘I suppose that he {is scared / has a terrible fear of women}.’

- b. Je **lui** suppose { *peur / une peur terrible des femmes }. (ibid.)

I him-DAT suppose fear a fear terrible of-the women
‘I suppose that he {is scared / has a terrible fear of women}.’

このほかにも制約があることから (cf. *Je **lui** crois une moto. (Jones 1996)), 認識的与格構文は単に所有関係の認識を表すのではないことが見て取れる。基本的に、この構文は与格標示の人間が直接目的語の示す属性や特性的なものを有しているという気づきや想定を表すために用いられる。抽象的な所有の想定を表す用法は授与動詞 *donner* ‘give’ にもあり、認識的与格はプロトタイプの与格と関連があると思われる。

- (4) a. Je **lui** donne cinquante ans.
I him/her-DAT give fifty years
‘I think he/she is fifty years old.’

- b. Je **lui** suppose cinquante ans.
I him/her-DAT suppose fifty years
‘I suppose he/she is fifty years old.’

本研究では、Van Peteghem (2006) も示唆しているが、認識的与格は付与を表す動詞 (*donner* ‘give’ や *attribuer* ‘attribute’) と結合する語彙的与格からの拡張用法であるということを論じた。

参考文献

- Jones, Michael A. 1996. *Foundations of French syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
Kupferman, Lucien. 2004. *Domaines prepositionnels et domaines quantificationnels : Le mot de*. Paris: Duculot.

- Olsson, Hugo. 1984. La construction *Je lui trouve mauvaise mine* en français moderne. *Studia Neophilologica* 56. 183-213.
- Ruwet, Nicolas. 1981. The 'epistemic dative' construction in French and its relevance to some current problems in generative grammar. *Crossing the boundaries in linguistics*. (eds.). Wolfgang Klein and Willem Levett. Dordrecht: Reidel. 23-50.
- Van Peteghem, Marleen. 2006. Le datif en français: Un cas structural. *Journal of French Language Studies* 16 (01). 93-110.

起点位格 *locatif d'origine* の他動構文: *N-distinguer-N-deN*

敦賀陽一郎

元東京外国語大学 フランス語専攻

[以下の略号: N_0 : 第1項, N_1 : 第2項, N_2 : 第3項, N_3 : 第4項, N_0 : 主辞, V: 動詞, N_1 : 直接目的, $_{pl}$: 複数, $_{sg/pl}$: 単数または複数, $deN_{2.orig}$: 起点前置詞 *de* (“from”) つき間接目的, se_1 : N_0 と同一指示の動詞前置代名詞 (“-self”), $-prépN_3$: 第4項前置詞句, *par* (“by”): 動作主前置詞, $_{orig}$: 起点, *êtreVé* (“beVed”): 受動形, *et* (“and”): 等位接続詞, *Il* (“It”): 非人称主辞.]

前年度は到達点に関係する与格－方向性位格を分析したが、今回はこれに対立する起点 (*point d'origine*) に関係する動詞 *distinguer* 「区別する」の構文 (*distinguer-N-deN* “*distinguish-N-fromN*”, *se-distinguer-deN* “*distinguish-itself (themselves) -N-fromN*” 等) を *Le Monde* 紙 (1994) の 959 例 (以下 *occ.*) を元に調査する。主な関連構文は次の通りである。1. $N_0-V-N_{1.sg/pl}$ (533 *occ.*), 2. $N_{0.sg/pl}-se_1-V$ (328 *occ.*), 3. $N_0-V-prépN_1$ (37 *occ.*), 4. $N_{0.sg/pl}-êtreVé$ (56 *occ.*) 特に二グループの対比 (「A を B から区別する」, 「A と B を区別する」等) の観点からは次の下位クラス構文 (計 576 *occ.*) の比較が問題になる。(人称自動詞構文 5. N_0-V (直接, 間接目的なし: 5 *occ.*) や非人称構文 6. *Il-V* (0 *occ.*) は無視しうる。)

1.2.1.	$N_0-V-N_{1.pl}$	112 <i>occ.</i>
2.5.1.	$N_0-V-N_{1.sg/pl}-deN_{2.orig}$	212 <i>occ.</i>
2.2.	$N_{0.pl}-se_1-V$	35 <i>occ.</i>
2.3.1.	$N_{0.sg/pl}-se_1-V-deN_{2.orig}$ ($-prépN_3$)	96 <i>occ.</i>
2.3.3.2.	$N_{0.pl}-se_1-V-parN_3$	67 <i>occ.</i>

3.2.	N_0 -V-entre $N_{1.pl.loc}$	34 occ.
4.2.2.	N_0 -V-entre $N_{1.loc}$ -et- $N_{1.loc}$	23 occ.
4.2.1.1.	$N_{0.sg}$ -êtreVé-de $N_{2.orig}$	6 occ.
4.2.1.2.	$N_{0.pl}$ -êtreVé-de $N_{2.orig}$	3 occ.
4.2.2.2.	$N_{0.pl}$ -êtreVé-par N_3	11 occ.

Distinguer の中心的な意味である「A を B から区別する」との関連で次の三構文を比較する : i. On distingue A de B “One distinguishes A from B”, ii. On distingue A et B “One distinguishes A and B”, iii. On distingue entre A et B “One distinguishes between A and B”. 高頻度は i, ii の他動構文と iv. 代名動詞構文 A se distingue de B “A distinguishes Aself from B” で, 出現数は i. 212, iv. 96, ii. 53, iii. 23 の順になる . A と B の「対比」は de つきの i, iv が一番明確であり, 次は entre による iii であるが iii は低頻度で ii との区別も不十分である.

参考文献

- GROSS, Maurice (1975). *Méthodes en syntaxe*, Paris : Hermann.
- GROSS, Maurice, COURTOIS, Blandine (pr.) (1997). *Index du DELAS. v08 et du Lexique-Grammaire des verbes*, Paris : Université Paris 7-CNRS UFR d' informatique LADL; (2011). Gross-Marne La Vallée.index-entries.csv.
- GUILLET, Alain & Christian LECLERE. (1992). *La Structure des phrases simples en français, Constructions transitives locatives*, Genève : Droz.
- MARTINET, André (1979). *La Grammaire fonctionnelle du français*, Paris : Crédif-Didier.
- TSURUGA, Yoichiro 敦賀陽一郎 (2020). 「フランス語における動詞 distinguer の構文 — N-V-N-deN, N-V-N-et-N, N-V-entreN-et-N について Les constructions du verbe distinguer en français — autour de : N-V-N-deN, N-V-N-et-N, N-V-entreN-et-N 」, 東京外国語大学, 『ふらんばー』 46, 1-17.

不定詞付き対格構文における対格の出没 — 動詞 *allege* の場合 —

中澤和夫

青山学院大学 文学部英米文学科

不定詞付き対格 (accusative with infinitive) とは, (1) に見るように, 線形構造としては主語名詞句の後ろに動詞が来て, その後ろに対格名詞句そして *to* 不定詞句が後続する構造である。

(1) $NP_1 V NP_2 to VP$ (NP_1 は主語名詞句, NP_2 は対格名詞句)

このような線形構造を持ついくつかの構造は, 表面的には同じ範疇の語連結であっても, 現われる動詞によって, いわゆる「深層構造」が異なり, それに応じてさまざま, 統語的に異なった振る舞いを示す。代表的な動詞の例として *believe*, *want*, *force* を考える。それぞれの場合の NP_2 は WH 移動が可能で, *want* 以外では NP_2 は受身の主語に移動可能である。しかし, これらの動詞で, その後ろの対格名詞句 NP_2 を欠いた形 $NP_1 V to VP$ となると, *want* 以外では, いずれもが不可, すなわち非文法的である。

これらの動詞に対して, *allege* の振る舞いはかなり異質である。これらの動詞の振る舞い, および *allege* の振る舞いを比較して表にすると以下ようになる。

表1 *believe* と *want* と *force* と *allege* の構文タイプ

	<i>believe</i>	<i>want</i>	<i>force</i>	<i>allege</i>
(a) $NP_1 V NP_2 to VP$	OK	OK	OK	*(OKもある)
(b) $WH_i NP V t_i to VP$	OK	OK	OK	OK
(c) $NP be Ven t_i to VP$	OK	*	OK	OK
(d) $NP V to VP$	*	OK	*	OK

本研究では, この *allege* の現れる構文は, いわば *believe* タイプから *want* タイプに拡張したという洞察のもと, 動的文法理論による分析を提出する。

参考文献

中澤和夫 (2021) 「19 世紀における動詞 *allege* の助動詞化」『近代英語研究』第 37 号, pp. 1-18.